

平成二十五年十二月一日発行 第二十三巻第十二号 通巻第七〇号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

平成25年12月号

岡井省二創刊



源 流

高橋将夫

身の丈を知りたる秋の波頭
むしのいい話案山子も耳かさず
啄木鳥の木を打つ音によどみなし
携帯で携帯探す秋の昼

秋虹のエッセンスなる五色豆
鹿火屋守鹿の話の他はせず
抜きん出るもの蘆原になかりけり
眠る子を置けば泣き出す太閤忌
原子炉と花瓶の中の秋の水
震災の大地を踏みて踊るなり
源流は水の惑星天の川

槐安集

水野恒彦

ヴィオロンの終章銀河濃くなりぬ
旅立ちの露りんりんと光り合ふ
抛りどなきうしろ姿の秋の蝶
鶏頭にだまつて通る人ばかり
少年の虫籠むとの蟲のひとつ死す

延広禎一

いつたんはサフランに触れ石に触れ
雨晴れて算の水のさやかなる
絵心経を当てつこしている敬老日
刀豆を刻んでゐたる白襪
釘抜きを空打ちしをる閻魔の日



加藤みき

桐一葉行くも退るもまにまにに
ひくひくと邯鄲の胴うごきをる
秋冷やこつこつこつとハイ・ヒール
月明のいろを失ふ赤鳥居
本番に備ふさらひや昼の虫

石脇みはる

竹林に抜け道のあり秋の雲
生きざまは無造作でよし夜の秋
丹生村は父のふるさと稲架並ぶ
雁の列デカンショ節の歌うたう
たんぼ道宵待草の黄を愛す

中島陽華

おのころや麦藁いさき上りける
酷暑かな円の赤道大団円
ぞつこんの熊野へ走る秋の雷
輪唱のかへるの歌や秋暑し
黎の杖のきらら坂秋の雲

雨村敏子

海色のヨーヨーを釣る祭かな
大太鼓小太鼓連打大西日
黒谷へ白水わたる枳殻の実
先生の隣に坐る涼しさよ
深秋の狼毫一つとり出だす

竹内悦子

秋嵐黒谷金戒光明寺
莫蔭敷いて松手入れする梯子かな
女みな神と呼ぶるる菊脛
六道の辻より釣瓶落しかな
蓮の実の顔を出したる笑ひかな

本多俊子

秋の月
ひやひやと耳奥あゆむ能の舞
神鈴をならすたび秋深まりし
研ぎ上げた刃のやわらかし星月夜
息深くして夜空あり秋あざみ
秋水に人間は脚二本かな

近藤喜子

秋光祝「光のうつほ」に心の翼はるかへと
少年の聖地よ蟋蟀追ふ野原
あをあをと身を淨む海秋まつり
秋光や鳥の落とせし銀の箔
月夜茸われの海馬も光る頃

瀬川公馨

あさがほの肌みるみる宇宙塵
月夜にて寿衣を欲しがる媪かな
諸床にずんどうの體ありにけり
朝風のモルゲンローズはゆる海
ぬめぬめと大海亀の上陸す

久保東海司

雨ながら鏡の奥の山粧ふ
日盛りの浜辺に雑魚のすだれ干し
湖を閉づ霧ねんごろに山包む
ゆるやかな霧ゆるやかに湖晴るる
ほどほどの生活たつきに露地の蚯蚓鳴く

中野京子

ぎらつきの消えて手にふる秋の色
清流の底の小石よ天の川
B面がA面となる夜の虫
身には水心に言葉白芙蓉
風景も人の履歴も石叩き

柳川 晋

乱世の梟雄の貌いなびかり
ルビコンを渡る覚悟の牛蒡引き
神々の欲望白き曼珠沙華
火入れしていのちの古酒となりにける
芋名月後ろは見せぬと笑ひけり

岩下 芳子

金木犀人の匂ひを消しにけり
これからが青春青き銀杏の実
極楽の風に乗りたる赤とんぼ
秋の潮海に縞目の模様かな
秋耕の土塊深く浅く掘る

近藤 芳子

朝風や手の平で切る新豆腐
蕪の花摘みくれし手の匂ひかな
拾はざる零余子に心残りたる
少年の草の香させて過りけり
煮物上手な伯母退院す竹の春



槐市集

江島照美

鵜篝の水面に揺るる火の柱
外つ国で知る満天の星月夜
花木槿紅を隠したままなりし
深山にモダン建築あきつ飛ぶ
夕映えや蠅螂渡る通路

熊川暁子

月明の木を離れたる木霊かな
屈託を尽して去りぬつく法師
飛石のそれぞれの影水澄めり
身の内の色にむせけり泡立草
月の夜の兎の影を尋ねをり

桑原逸子

秋あかねアルプスの空はるかなり
心経を父母と誦しをり鯛雲
寝間の戸の半開きなりきりぎりす
テーブルを磨き込んだり涼新た
秋深し樹齡は知らず並木道

後藤マツエ

秋日傘女の意地のハイヒール
雷鳴や耳疎き身の肌を刺す
寸土にも農の魂大根蒔く
ごんの里赤疎ましや曼珠沙華
鯛雲何の前触れ赤の濃し



槐集

高橋将夫選

泥川に大鯉の道野分晴 京都 竹中一花

刀豆に日色風色水の色

獸道分けゆくお花畠かな

雁の風を肌へに蔵守る

秋空や机に聖書と歎異抄

乱れ萩風のこころを読みきれず 枚方 熊川 暁子

碧天を支えて曲る秋茄子

下駄の緒の朱が染まるまで盆踊

稲妻や火禊といふ美しき枷

名月をこはさぬやうに露天風呂

風にのり光にのりて鳥渡る 岡崎 寺田すず江

流離^{さすら}ひて花野に辿りつきにけり

曼珠沙華ブラックホールに吸ひ込まる

さざなみの荒れず焦らず秋を研ぐ

名月の兎の餅と芒かな

毬栗の転がつてゆく浄土かな 寝屋川 前田美恵子

根の国の人も混じりて月の客

新涼をたつぷりもらふ児の寢息

木の実降る丘にも白昼夢にも

火の国の女の好む温め酒

まつさらな釘を打ち込み秋気澄む 大阪 有松 洋子

夜は鬼が佇む花野水の音

土塊のほろと崩れる屋の虫

天の川一角獸は星を飲む

コンテナは棺にも似て鉄路冷ゆ

猫じやらし鬼の居ぬ間にはば利かす 江島 照美

琴線をまさぐるごとくちちろ鳴く

虫も葉も色を変へては時を待つ

パンプスの枷めいてくる秋出水

秋の朝姥は美婆へと目覚めけり

銀河往来

高橋将夫

◇「槐集」観照

雁の風を肌へに蔵守る 竹中 一花
雁(かりがね)の渡るころの風を肌にかけて、酒蔵か何か古くからの蔵を守っている人。秋風の爽やかさと、人肌のぬくもりと、伝統のゆかしさが伝ってくる一句。

〈泥川に大鯉の道野分晴〉の句では、台風一過の泥川の様子が具体的に描かれており、〈刀豆に日色風色水の色〉の句では、大きな刀豆の質量感が「日色風色水の色」と巧みに捉えられている。

〈獣道分けゆくお花鳥かな〉の「獣道」と「花鳥」の取合せや、〈秋風や机に聖書と歎異抄〉の「聖書」と「歎異抄」の取合せも絶妙。

乱れ萩風のこころを読みきれず 熊川 暁子
萩が風に乱れたのは、風の心が読めなかつたからだという。もし読めていたら、かくも乱れなかつたのだろう。「美は乱調にあり」(瀬戸内晴美)という。読めないからいいのかもしれない。

〈下駄の緒の朱が染まるまで盆踊〉の句の「足の指が下駄の緒の朱に染まる」や〈名月をこはさぬやうに露天風呂〉の「名月をこはさぬやうに」の美的感覚は掲句の「乱れ萩」に通じるものがある。

〈稲妻や火櫛といふ美しき柳〉では、「稲妻」「火櫛」の取合せもさることながら、下五の「美しき柳」への飛躍が素晴らしい。〈碧天を支へて曲がる秋茄子〉は俳諧味たっぷりりで、まさに融通無碍の感がある。

風にのり光にのりて鳥渡る 寺田すず江
「風に乗って鳥が渡る」は月並みであるが、「光にのり」が加わると見違えるような新鮮さを感じさせる。秋天を渡る鳥の群れが輝いて見えてくる。

〈流離ひて花野に辿りつきにけり〉はさまよっても、花野にたどり着いたのだからめでたい。たどり着けたのは、へさざなみの荒れず焦らず秋を研ぐの句のように、「荒れず焦らず」に行つたのがよかつたのかもしれない。

〈名月の兎の餅と芒かな〉は「兎の餅」が面白い。古典とメルヘンの融合といったところか。

毬栗の転がつてゆく浄土かな 前田美恵子
団栗がころがれば池に落ち、毬栗は浄土へころがつていくという。〈根の国の人も混じりて月の客〉や〈木の実降る丘にも白昼夢にも〉も非日常の世界を詠んでいるが、妙に説得力があつて、ありそうな景に見えてくるから不思議である。

コンテナは棺にも似て鉄路冷ゆ 有松 洋子
コンテナが棺に思える冷え冷えとした鉄路。緊張感が漂う一句である。〈夜は鬼が仔む花野水の音〉もまた、厳しい精神の風景といえよう。一転、〈天の川一角獣は星を飲む〉は日本と西洋の融合の世界。

猫じやらし鬼の居ぬ間にはば利かす 江島 照美
少し家を空けると、猫じやらしがはびこる。まるで鬼の居ぬ間に留守ごとをするように。さしずめ、鬼は作者かもしれない。

(以下略)